

共同体の社会には、様々なスケールの異なる時間循環があり、その総合が共同体の時間世界だったのではないだろうか。

直線的な時間に身をおいてみると、人間の一生も有限なもののようにみえてくる。この時間世界の中に存在するようになったとき、時間は管理され、合理的に消費されなければならないものになった。こうして冷徹な直線の時間の前に人間はひざまずく。

ときどき村人は「畑仕事は楽しみだね」というような表現をすることがあるけど、それは畑仕事が好き、ということではなく、畑仕事をしているとその中から楽しみがわきでてくる、という意味である。

(内山節)

時間はまさに主体と他者との関係そのものである

(エマニュエル・レヴィナス)

厚生科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）

分担研究報告書

「秋田の嫁」の介護意識に関する探索的研究

分担研究者 児玉 寛子 秋田桂城短期大学助手

研究要旨：秋田県大館市・田代町で在宅要介護高齢者とその主介護者の基本属性について調査したところ、「同居の嫁」が主介護者である割合が高く、さらに介護意識にも特徴が見られた。そこで本研究では、「秋田の嫁」の介護意識をさらに掘り下げて解明するため、「嫁」である在宅介護者に探索的インタビュー調査を行った。その結果、「秋田の嫁」は同居する時点で「夫の親の介護」を暗黙のうちに受け入れており、介護が進行していく中で段階的に介護意識が変化していることがわかった。今後は、介護意識の変化プロセスとその要因を詳細に分析し、嫁の介護の限界点を探りたい。

A. 研究目的

「同居介護」は日本の伝統的家族の中で受け入れられてきた家族機能のひとつである。なかでも「嫁」による介護は欧米諸国には存在しない介護スタイルである。

秋田県大館市・田代町での調査分析から、「嫁」が主介護者である割合が高く、「秋田の嫁」に特有の介護意識があるのではないかと報告がなされた。

そこで本研究では、この結果を踏まえて「秋田の嫁」の介護意識についてその特徴を明らかにするとともに、介護プロセスにおける意識の変化について探索的研究を試みた。

B. 研究方法

秋田県大館市在住の「嫁」として在宅介護を経験した者 3 名にインタビュー調査を実施した。年齢は全員 50 代である。「介護を行う中でつらかったこと」「嫁の立場」などについてたずねた。

C. 研究結果

インタビューの結果、「嫁」は夫の親と同居する時点で「いずれ私が親の介護をする」と覚悟を決めていることがわかった。これは嫁にとっては「ごく当たり前こと」で、家族内でも暗黙のうちに受け入れられる。また、実際に介護が始まると「嫁の役目」という使

命感のもとに家族内の調整役を果たしていた。介護が長期化していくと、別居親族の態度や言葉によって嫁の介護意欲が左右されることがわかった。

D. 考察

秋田の嫁にとって、家族と介護をつなぐことは嫁としての役割である。また義父母の介護を通じて積極的に家族員の調整役を果たすことは家族内のストレスを減少させることにもつながる。嫁が介護体勢にイニシアティブを持てるかどうか、在宅介護を継続できる要因になるとも考えられる。介護の開始時期から安定期までの介護意識の変化を捉えたい。

E. 結論

「秋田の嫁」の介護動機には、家族の絆を強く保とうとする意識がある。それは家族の調整役を果たそうとする姿からもうかがい知ることができた。しかし、介護期間や要介護者の状態、家族状況の変化によってその意識は変化するので、今後は、介護意識の変化に影響を及ぼす要因を詳細に分析し、嫁が介護する場合の限界点や継続要因を見出すことが課題である。

嫁としての覚悟とプライド ～秋田の嫁の介護意識～  
児玉寛子

このレポートは、私が以前、ケアマネージャーとして勤務していた頃に出会った家族の中から「嫁」の立場で在宅介護をされていた方々の介護意識についてまとめたものである。レポート作成に当たっては、今回、あらためて3名の介護者にインタビューした結果と私の当時の経験を加味してある。

今回のインタビュー協力者は、現在、在宅介護を継続中の方が1名、在宅介護を経験した方が2名の計3名で、全員が以前、介護者家族として私が関わりを持った方々である。

なお、恣意性を排除するために出雲祐二氏とインタビューデータの解釈ならびに内容の確認を行っている。

### 1. 嫁ぐ時の覚悟

- ・夫の両親との同居＝親の介護は私（嫁）の役目になる
- ・「嫁として同居する時から、いずれ親の介護をしなければならないのだという覚悟はしている」
- ・「介護する覚悟」…決して深刻で重い響きはない。「当たり前のこと」という意識が強い。
- ・家族内では暗黙の了解（合意事項）となっている。

### 2. 嫁が主介護者となるプロセス

#### 【両親との同居】

両親のうち、どちらかが要介護状態となった



配偶者が介護…「まだ嫁の世話にはなりたくない」

嫁は「来る時が来た」と覚悟を決めているが介護協力は拒否される

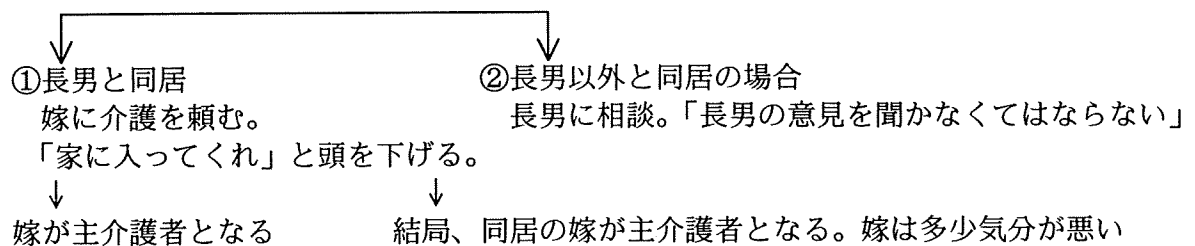


嫁には多少の介護役割が発生するものの仕事も続けられる

（家族と仕事との両立に悩む時期・家族がバラバラになる不安を感じ始める）



配偶者による介護の限界



#### 【どちらか一方との同居】

要介護状態となった時点で、ごく自然に嫁による介護が始まる。家族会議（子ども達）が持たれることもあるが、これは別居親族から介護協力や最終ゴールについての決定権を同居の息子（主に長男）に一任させる事が目的である。実際に介護する（している）嫁に発言権は少ない。

### 3. 嫁の心境

#### 【介護開始当初】

- ・「介護したくない」とは思わない。
- ・要介護者本人や別居親族、近隣から「嫁なんだから当たり前」と言われることは少ない。（70～80歳代の親族や別居の娘は強制することもある）
- ・方法論として「どうやって介護していったらいいのか」という不安。（家計のために仕事を続ける場合は特に強い）
- ・実の親ではないが「親」と思うからこそ「介護して当然」という気持ち。
- ・家族が円満に暮せるための自己選択（調整役としての嫁）

#### 【介護奮闘期】

- ・介護するのは当然のことだが、心から「介護してあげたい」と思う気持ちとは別物。
- ・周囲の人からどう見られようと介護しているのは自分なのだという自負。
- ・衰えて寝たきりになっていく姿は見たくない。  
(厳しくしてしまうこともある)
- ・別居親族（特に娘）からのねぎらいの一言が介護意欲を支える。  
(自分の状況を理解してくれる人がいないと追い詰められていく)
- ・介護に関する決め事に自分を加えてもらえない情けなさ。  
(嫁に決定権がない。どうせなら任せてくれたらいいのにといい思い)

#### 【介護安定期】

- ・相談できる第三者の存在（近所の他人、福祉関係者など）があると心強い
- ・相手の状態に合わせて介護できるようになってはじめて「恩返し」や「感謝の気持ち」を持てる。
- ・同居別居家族の理解があれば自分の時間を持つことができ、幸せを感じられる（「思い通りにできている」という言葉が出る）
- ・介護だけではない自分の生活を見出すことができる  
(ボランティア、パート勤務、友人との外出など)
- ・介護のために自己犠牲を払っているとは感じない

#### 4. 秋田の嫁の介護意識

私がこれまでに関わってきた「嫁」の立場の人達は夫の両親との同居を決心する時点で、ごく当たり前のこととして「いずれ夫の親の介護が訪れること」を了解している。そのため、現実にもその場面に際しても抵抗感は少なく、義務感というよりもある種の使命感のような思いから役割を果たそうとする姿が見られる。さらに、自分が介護する立場であるという認識が前提となっているために自己犠牲を払ってまで介護しているという意識は薄いようである。彼女達には「嫁としてのあるべき像」の名残をとどめつつも、嫁としての役割を果たすことに責任とプライドを持ち、その中で自分のスタイルを見出そうと模索している姿を見ることができる。

しかし、その介護意識に影響を及ぼすのが別居親族の存在である。嫁が自分のスタイルを表出できるか、介護意欲を持続できるかどうかは、別居親族が介護している嫁に対してどの程度理解を示すかによって左右される部分は大きいようである。ねぎらいの言葉ひとつが心に染み、「自分は幸せだと感じた」という話があった。逆に嫁を非難する言葉ひとつが要介護者の亡くなった後にも傷となり「本当にこれで良かったのか」と後悔だけが残ってしまったという話もある。「家の嫁」としてみるか、「自分たちの代わりに親を介護してくれている嫁」と見るかによって「嫁の介護意識」が良くも悪くも変わり得るといえるのだろう。

### III. 研究成果の刊行に関する一覧表

Campbell, J.C. & Campbell, R. Adapting to Long-Term-Care Insurance. In "The Changing Face of Aging," Special Issue of Social Science Japan 27, November, 2003. P.3-5.

Campbell, J.C. "Kaigo Hoken no Sannenkan." Invited talk, Toyo University, Tokyo. May 31, 2003.

Campbell, J.C. "Social Politics and Long-Term-Care Insurance in Japan." Invited talk, Sejong Institute. Seoul. June 4, 2003.

Campbell, J.C. "Design of Long-term Care Insurance in Japan and Germany: Choices, Policy Legacies, and Problems." Invited talk, School of Public Health, Seoul National University. June 5, 2003.

Campbell, J.C. "Aging Along with Tokyo." Paper for the public symposium of the Aging in Global Cities project. Paris: June 13, 2003.

Campbell, J.C. Panel on aging and long-term care, Kita-Akita Koureisha Kenkyuukai. Odate City, Akita: July 28j, 2003.

Campbell, J.C. "Japan's New Long-Term Care Insurance System." Presentation sponsored by the Rhode Island Japan Society and AARP Chapter. Newport RI: September 2003.

Campbell, J.C. "Comparing LTCI in Japan and Germany." Paper for a special seminar at INED (National Institute of Demography). Paris: October 6, 2003.

Campbell, J.C. "Japan's LTCI: Pretty Good So Far." Presentation at the International Forum on Long-Term Care, AARP. Washington DC: October 22, 2003.

Campbell, J.C. (Co-edited with Hiroko Akiyama). "The Changing Face of Aging," *Social Science Japan* 27 (November, 2003).

Campbell, J.C. Organized and chaired panel, "Changing Patterns of Caregiving in Japan," and delivered paper on "The New Long-Term-Care Insurance System." Ann Arbor: University of Michigan, February 2, 2004.

Campbell, R. Panel, "Changing Patterns of Caregiving in Japan," and delivered paper on "The New Long-Term-Care Insurance System." Ann Arbor: University of Michigan, February 2, 2004.

Campbell, R. Changing Care Relationships in Japan: Qualitative Interviews with Caregivers and Care Recipients. The 57<sup>th</sup> Annual Scientific Meeting of the Gerontological Society of America. USA: Washington D.C.

Fetters, M. Panel, "Chaging Patterns of Caring for the Elderly in Japan. Cleveland. John Carroll University. February, 2004.

出雲祐二 都市部と農村部における在宅要介護高齢者と家族介護者の基本属性に関する記述的分析:高齢者の在宅介護と健康に関する東京・秋田調査(2003年)を通じて 秋田桂城短期大学研究所報第7号,2004.

出雲祐二 都市部と農村部における在宅要介護高齢者と家族介護者の基本属性に関する記述的分析：高齢者の在宅介護と健康に関する東京・秋田調査(2003年)を通じて 日本社会福祉学会 52 回大会 2004 年 10 月 東京：東洋大学

Izumo, Y. Discussant, "Chaging Patterns of Caring for the Elderly in Japan. Cleveland. John Carroll University. February, 2004.

Kodama, H. Discussant, "Chaging Patterns of Caring for the Elderly in Japan. Cleveland. John Carroll University. February, 2004.

Long, S. Panel, "Chaging Patterns of Caring for the Elderly in Japan. Cleveland. John Carroll University. February, 2004.

Long, S. Panel, "Changing Patterns of Caregiving in Japan," and delivered paper on "The New Long-Term-Care Insurance System." Ann Arbor: University of Michigan, February 2, 2004.

Muraoka, K. Discussant, "Chaging Patterns of Caring for the Elderly in Japan. Cleveland. John Carroll University. February, 2004.

西田真寿美 要介護高齢者と家族の介護関係 —出稼ぎ労働者の帰郷後の軌跡— 第46回日本老年社会学会大会 2004年6月 宮城：東北文化学園大学

西田真寿美 要介護高齢者と介護者の介護関係と介護体験の構造 老年看護学会第9回大会 2004年11月 茨城：茨城県立医療大学

西村昌記 家族介護者の充実感と負担感：続柄による差とその背景要因 日本家族社会学会第14回大会 2004年9月 東京：日本大学

西村昌記 家族介護者の充実感と負担感：サービス利用との関連 日本社会福祉学会 52 回大会 2004 年 10 月 東京：東洋大学

Nishimura, M. Discussant, "Chaging Patterns of Caring for the Elderly in Japan. Cleveland. John Carroll University. February, 2004.

須田木綿子 IADLニーズをめぐる被介護者 - 介護者の認識と在宅介護：階層線型モデルの適用 第46回日本老年社会学会大会 2004年6月 宮城：東北文化学園大学

Suda, Y. IADL Needs and Service Use:A Dyadic Analysis The 57<sup>th</sup> Annual Scientific Meeting of the Gerontological Society of America. USA: Washington D.C.

Suda, Y. Panel, "Changing Patterns of Caregiving in Japan," and delivered paper on "The New Long-Term-Care Insurance System." Ann Arbor: University of Michigan, February 2, 2004.

Suda, Y. Devolution and Privatization Proceeded and Centralized System Maintained: A Twisted Reality Faced by Japanese Nonprofit Organizations. (Submitted)

高橋龍太郎：要介護高齢者の低栄養リスク：NSI (Nutrition Screening Initiative)日本語版作成の試み 第46回日本老年医学会学術集会・総会 2004年6月 東京：幕張メッセ

Takahashi, R. Panel, "Changing Patterns of Caregiving in Japan," and delivered paper on "The New Long-Term-Care Insurance System." Ann Arbor: University of Michigan, February 2, 2004.

